新譜月評

室内楽曲

大木正純　中村孝義

大木正純●Masazumi Ohki

推薦　ブラームス、ピエルネ&フォーレと、比較的地味なアルバムを小出しにしてきた――あくまでも日本での話――トリオ・ヴァンダラーが、そろそろ潮時とみたか、最大力作ベートーヴェンのピアノ三重奏曲全集4枚組のリリースに踏みきった。録音はほぼ5年前のもので、フランス本国ではすでに高い評価の定着したセットではないかと思われる。収録曲は通常の通し番号付き7曲のほか、ボン時代の初期作1曲、マキシミリアーネ・ブレンターノに練習用としてプレゼントしたあの愛らしくチャーミングな単一楽章作品1曲、さらに変奏曲2曲を含む、トータル11曲である。

演奏は期待を上回る優れた出来映えで、またひとつ、全集に新たな名盤が追加されたことを喜びたい。まず作品1の3曲では、気負わず、優しく柔らかなタッチで――とりわけピアノのソフトな感触が印象的――みずみずしい魅力を浮き彫りにした最初の2曲に対して、ハイドンを面食らわせたという第3番ハ短調が、そう、これこそがベートーヴェンなのだと私たちがいま思う、まったく別の世界を示しつつ立ち現われてくるあたり、なるほどと納得させるものがある。しかしそのインパクトの強い演奏からも、こまやかなデリカシーが失われることは決してない。

続いて力強いアンサンブルで伸びやかに歌い上げた第4番《街の歌》と、特異な効果の追求ではなく本来の音楽的妙味を最大限に引き出すべく冷静沈着なスコアの読みを貫いた第5番《幽霊》を経たあとの、第6番変ホ長調にも注目したい。機会音楽的な作品としてやや軽んじられることもなくはない1曲だが、トリオ・ヴァンダラーは第1楽章主部の堂々たる歩みと熱気に満ちた終曲（第3楽章）で前後を力強く固めて曲に風格と重みを与え、《大公》への確かなステップとしての側面を示すことに成功している。そして真打ちの第7番《大公》。これまた力で押すことなく、深く大きな呼吸で、柔らかな起伏を描きつつ雄大に描かれてゆく、実に見事な演奏だ。中でも第3楽章、叙情的な美しさの中にもある種の荘厳な空気を孕んだ主題が、変奏の推移のうちに発展してゆくあたりはすばらしい。さらに、変奏曲2曲を含むほかのどの曲においても、美しい瞬間が無数にとらえられているので本当はそれらにもふれるべきなのだが、残念ながらスペースが足りない。

■ベートーヴェン／ピアノ三重奏曲全集

〔①第1番②第2番③第3番④第4番《街の歌》⑤創作主題による14の変奏曲⑥第5番《幽霊》⑦第6番⑧第7番《大公》⑨カカドゥ変奏曲⑩変ホ長調WoO.38⑪変ロ長調WoO.39〕
トリオ・ヴァンダラー
［ハルモニア・ムンディ・フランスⒹ KKC5635（4枚組）］ ¥5555

峰尾昌男●Masao Mineo

［録音評］1年ほど間があいた2回に分けて録音されているが，チームと会場が同一なので音色上の違和感はまったくない。少し奥まったセンターにピアノ，やや左にヴァイオリン，右にチェロが定位するがあまり明瞭ではなくかなり溶け合って聞こえる。しかし各楽器の音色は明瞭でピアノも距離感を持ちながら明瞭度は高く，トリオとしての中心的な役割をよく表現している。〈93〉

中村孝義●Takayoshi Nakamura

推薦　このところ毎月のように新譜がリリースされてくるトリオ・ヴァンダラーだが、今回はいよいよピアノ三重奏団にとって本丸ともいうべきベートーヴェンのピアノ三重奏曲全曲がリリースされた。録音されたのは2010年と2011年なので、最新録音というわけではないが、すでに結成されて23年が経過したときのものなので、まさに満を持しての録音だったということができるだろう。いつもいうことだが、ピアノ三重奏団が恒常的な団体として継続的に活動を続けるのは意外と難しく、現在、彼らのように長い年月にわたって活動している団体は他にはないことを考えると、彼らの存在は非常に貴重だといわねばならない。性格の異なる3つの楽器が集まっての編成だけに、本来室内楽的に融和することも、また逆にそれぞれをソリストとして際立たせることも容易ではないのだが、20年以上も活動を共にしていると、互いがどのように融和したり、それぞれがどのように主張を打ち出したりするのかについてもさすがに手慣れたものを感じさせる。1枚目と2枚目に収められている作品1の3曲を耳にしていると、この作品の単なるサロン的な音楽に終わらない時代を画する斬新な手法と、ハイドンやモーツァルトから引き継いできた伝統的なスタイルとの併存が、演奏する上でも実に巧みに配慮され、生かされていることがよく分かる。各楽器が決してむやみに飛び出すことなく、全体としての調和が巧みに図られていると同時に、一方でハ短調の終楽章などでは、非常に思い切りの良い鮮烈な表現が見られる。そして3枚目に収められた作品70の2曲になると、音楽の在り方の変化に合わせて、演奏自体もその構えが一回りも二回りも大きくなるとともに、各楽器の主張や存在感が一層際立つようになる。もちろん、作品自体が持つ覇気や核心に向かって凝縮していく集中力が強いだけに、各楽器が決してばらばらになることなく、密度の濃いアンサンブルを示しているのは言うまでもない。そして4枚目に収められた作品97、つまり《大公》トリオになると、作品70で見せた集中力に加えて、より気宇の大きな表現が加わるが、彼らの旨とするところは、かつての巨匠たちが行なったピアノ三重奏における気宇の大きさよりは、むしろ緻密で洗練されたアンサンブルであることがはっきり見て取れる。この全集には、この他にもベートーヴェンがこの編成のために書いた全曲が優れた演奏で収められているのが嬉しい。